果」といふ言葉は、惡い結果とか、不仕合せとかいふことにのみ用ひ、「果報」といふ言葉は、善い結果とか、幸福とかいふ意味に使ふ、之れも誤りであります。世間世間といふ言葉を、たゞ他の事、自分已外の世界のことのやうに考へるも、同樣の間違でありまして、世間といふ當の主體は、自己であることに氣付かねばなりません。

五、自心は主とするに足るや否や、勿論、問題とするまでもなく、我心に任せた日暮をしないのが佛敎であります。抑も佛敎の唯心論では、心を「藏」と稱します、くらであります。之れに「能藏」、「所藏」、「執藏」の三義ありと稱してありますが、何であれ彼であれ、容赦なく、どんなものでも取り入れる、作用のあるものゆゑ、「能く藏むる」といふ意味で「能藏」と稱し。一旦取り入れてみると、米なら米藏、麥なら麥藏、芋なら芋藏、大根なら大根藏と

中にあるもの次第で、藏そのものに名が付くやうに、色んなものを藏めて居るところとか、色んなものが藏めらるゝとかいふ意味で、「所藏」と稱し。金禰に馬の糞が包んであるとは知らず、矢鱈に外部だけに見惚れて居るやうに自分の根性魂を究めずして、上部ばかりに執着して、我れと我手に煩惱を起すやうな心であるから、「執藏」と稱するのである。

それ故、此心をあるじとしてをれば、大黑柱の腐つた家が、一人でに倒壞するやうに、どんな大怪我をするやも計り難いゆゑ、「佛法のこと、我が心にまかせず、たしなめと御掟なり、心にまかせては、さてなり」と蓮如上人は仰せられた。それで自分の心を、あるじとすることを止めて、佛のお心を、あるじとする、そうして持ち前の自分の心を、お客人の資格に廻すやうにする。お客さまに招ばれると、我家では、どんなに我儘な者でも、のこ〳〵と

出てならぬところへ出しやばつたり、不行儀をしたりすることを慎しむ、今も御主人の佛心に對して、我が心の方から慎む氣になるやうにするには、どうしても、これまでとすつかり主客顚倒して、我心をお客人にするが一等である。

六、 世間でも主客顚倒といふ事を申しますが、これは惡い方の間違をいふたものであります。今の主客顚倒は、善い方の側であります。それでは、どうすれば我心が、お客分に廻るかといへば、之に就て、石州の女同行、伊藤さきは、次のやうな歌を、お同行友達から敎はつたといつて、歡んで口ずさんで居られます。

聽いた信じた得たにはき、よろこび心を杖につき、慢心袋をぶら下げて、死出の山路を越しました、あんまりのんどがかはくから、お慈悲の水をのみました、なんだらのどにせかりだで、ごほん〳〵といふたれば、そつから疑とんで出て、これ疑なにごとか、お前に出る氣はないけれど、大きな佛智がはいつて來て、雜行も自力も疑も、をられませんからとんで出て、わたしの居り塲が新になりました。

實にこの通りでありまして、他力廻向の佛智が滿入して、心のお腹がふくれば、他のものはもう居り塲がないから、自然と飛びだして來るやうになります。

三　恩惠世界

七 「謹んで淨土眞宗を案ずるに、二種の廻向あり」、この廻向といふ味を、たゞ如來樣から、佛だねを下されて、佛の證を開かせて頂くことゝ考へ

我機の方に、無始已來熏染してをる、自力根性を拂ひ除けることは、私の方でやらなければならぬやうに思ふて、頂く方と、除ける方と、別々にして居るものがある。これは一應考へると、邪魔ものがあつては、這入られぬ譯なれども、明來闇去の喩のとほり、自力根性の捨たるまゝが、矢張り他力廻向のおはたらきであります。

そも〳〵御開山が、他力廻向と仰せられるは、或ものは廻向法だが、或ものは廻向法でないといふ如き、局限のある佛力ではなく、三世に亘り十方に貫き、すべてを廻向といふことを以て解釋せられた、頗る廣汎なるものである、此席では其意味のお話をいたさうと思ひます。

まづ、「二種の廻向あり」と云つて、次に往相廻向・還相廻向と列ねてある。此二つは、帳面で云へば、「入りの部」と、「出の部」とがあるやうなものでお

淨土に向つて、進み趣く、入りの部が往相廻向で、お淨土から、衆生濟度に還り來る出の部が、還相廻向である。然るに其の還相廻向には、どういふ事をするかと云へば、自分が經驗した所の、往相廻向卽ち眞實の敎・行・信・證そのまゝを、自由自在に使ふて、衆生濟度の大仕事をなすのである。恰も入りの部で這入つて來たお金そのまゝが、出の部で働いてをるやうなものであります。ところが、猶ほその上に、聖道自力の大小半滿權實等の一切の法門を、「利他敎化方便權門道路」であると仰せられた意味を考ふるに、我々が信仰已前に、色々迷ふた種々の法門は、一方の他力門を知らせるための、善巧方便であつたやうに、今度我々が還相廻向の、仕事をする時に、またさういふ權道を用ひて、衆生を覺醒せしむることができる、と仰せらるゝ思召は何であれ、此世界に廻向法でないものは、一つもないといふ事になります。前

に申した、石州のおささんが、雨の降る日に、他の人は愚痴をこぼす反對にお天氣ばかりでは、辛からうから、骨休めをさせて下さるために、雨が降るのであるといつて、いつもよろこんでをるのは、全く此の道理に契ふのであります。

八、御開山は此味を『化土卷』に傳敎大師の末法燈明記の文を、そのまゝ御引きなされて、自分の信仰として、あらはしなされたお言葉に

それ一如に範衞して、以て化を流すは法王なり、四海に光澤して、以て風に乘ずるものは仁王なり、しかればすなはち仁王・法王たがひにあらはれて、ものを開し、眞諦俗諦たがひによりて、敎をひろむ。このゆへに玄藉宇内にみち、嘉猷天下にあふる。

とあります、終りの方の「玄藉宇内にみち、嘉猷天下にあふる」とあるのは、

この大宇宙を、佛の衆生化益の道場と歡び給ふたもので、之れは傳敎大師の思召では、『法華』の「資世産業皆是實相」の敎理にもとづきて、宇宙そのまゝを、佛の相と見る、實大乘の法門を、あらはされたものなれども、御開山はそのまゝ轉用して、一切を如來のお手廻しと、感謝し給ふ御信仰を、此言葉によせて、表現せられたものであります。

此お言葉を拜讀する毎に、私は、私如き、君の恩を知らず、親の恩を知らなかつた者が、信仰問題に一歩を踏み込ませて頂くやうになつてから、初めて君父の恩の萬一を味はふことができた事を、非常に仕合せと喜ばして頂きます。私は明治三十七八年の戰役の際に、補充兵として召集せられました、時が時であつたから、之まで單調な生活をなし來つた私の心に、俄に大不安を感じたことが、信仰問題には無頓着であつた私を、激勵した第

一原因であります。除隊已後引續いて起つた、種々の面倒な問題が因緣で、私の腦髓の働きの大部分は、暫くの間、信仰問題に向つたが、遂に私は大安住の地を見出すことができたのである。その時の一刹那に遭遇した或る神秘的の經驗は、今どう考へてみても、不思議としか云ひやうがないのであります。兎もあれ私が求道心の第一歩は、軍隊に召集されたといふ事である。そこで私は、明治天皇が露國と、戰爭を開いて下された事、私を軍隊に召び出して下さつたことを、たゞの人殺しの戰爭、たゞの命令的の召集とは、思ふことができません、すべて私の信仰問題に關係があるところから、仁王と法王とが、たがひにあらはれて、私の心を開いて下され、眞諦の佛法と、俗諦の政治とが、たがひに相寄りて、私に敎を聞かせて頂くためであると、思はぬ譯にまゐりません、私はかくの如く、この廻向の宗

敎を味はてし頂いて居ります。

九、又この廻向について、往相廻向の外に、還相廻向を開いて下されたことを思ふに、如何に御開山の仰せられる、往生といふ證の境界が、活動的の希望に滿ちた境界であるかゞ窺はれます。と申すものは、一般に往生だの成佛だのといふ、悟りの境界を、極めて靜的な、無活動的な、老人の別莊生活にでも入るやうな風に考へられてをるが、今御開山は、それ等の消極的思想と、全で反對な、活動的の還相廻向を高調して、我々が人間としての生活を終るや否や、すぐに還相廻向の佛としての、大活動を始めるとなされてある之れはたゞの理窟ではない、說明ではない、御開山御自身が、如來の廻向を信じさせられた事の、如何ばかり深かつたかといふことを、あらはすものであります。

祖意を宣揚せよ

耶蘇教の信仰は、信・愛・望の三義を具し、神に對しては信、隣人に對しては愛、永生に向つては希望に充ちた、境界を憧憬すると說くゆへ、青年の人氣にも、現代的思潮にも、よく合するやうに、世人は思ふが、佛教はあまりに人間離れがして、人情に投じにくい上に、淨土門と來ては、いよ〳〵厭世教ぢや、老人教ぢやと、相塲が定まりさうな今頃、若しも開山がお出であそばさるゝならば、世人の量見違ひを、どのやうにお慨きあそばさるゝでありませう。我々流れを汲む者は、よく御精神のある所を察して、之を宣揚するに、努めなくてはなりません。

爾るに是れまでの人々、そんな事には餘り注意せず、往相廻向のお添物ぐらゐに、還相廻向を取扱つてをるから、御開山の御精神が徹底しやう道理がない。決してそのやうに輕いものではありません、「謹んで淨土眞宗を按ずるに、二種の廻向あり、一には往相なり、二には還相なり」と、眞宗教義の二本柱として、振り分けに御示しになつてある。而して教行信證の第四證の說明をなし給ふところの、證卷を拜讀するに、證その物の說明は、僅かに一分通りであつて、他の九分通りは、還相廻向の說明になつてをる。分量の多い少ないを、強ち標準とする譯ではないけれども、眞宗の證といふは、還相の大活動をなすことの、できるものであるといふことを、特に力を入れてあらはし給ふ祖意の程が、充分に窺はれるであります。

四　廻向法

一〇、いよ〳〵今席でお別れであります、『御式文』に「哀れなるかなや、恩顏は、寂滅のけぶりに化したまふといへども、眞影を眼前にとゞめたまふ、悲

しきかなや、德音は、無常の風にへだゝるといへども、實語を耳のそこにのこす。えらびおきたまふところの書籍、萬人これをひらきて、おほく西方の眞門にいり、弘通したまふところの教行、遺弟これをすゝめて、ひろく片域の群萠を利す、凡そその一流の繁昌は、ほとんど在世に超過せり」とあるがこれは御開山御入滅後のお守りで、眞宗益々繁昌の有樣を、讃嘆あらせられたものであります。併し乍ら、「一宗の繁昌と申すは、人の多く集まり、威の大いなることではない、一人でも信仰を得るものがあれば、それが一宗の繁昌である」とさへ仰せられてある事なれば、形式丈の繁昌では、御開山の思召には契はない、のみならず「抑も此の御正忌のうちに參詣をいたし、志をはこび、報恩謝德をなさんとおもひて、聖人の御前にまいらん人の中にをいて、信心の獲得せしめたる人もあるべし、また不信心の輩もあるべし、

以ての外の大事なり、そのゆへは信心を決定せずば、今度の報土の往生は不定なり、されば不信の人も、すみやかに決定のこゝろをとるべし」とあつて自己浮沈の大問題に關係することであるから、大事の中の大事である。そんな大事件であるゆゑ、非常に六ケしい事であるかと申せば、「機より成ずる大小乘の行ならば、法はたへなれども、機が、及ばねば、ちからなしといふこともありぬべし、いまの他力の願行は、行は佛體にはげみて、功を無善のわれらにゆづりて、傍法闡提の機、法滅百歲の機までも、成せずといふことなき功德なり、このことはりを、懇懃に、つげたまふことを、信せずしらざることを、おほきに、はづべしといふなり」。とあつて、廻向法であるゆゑ、少しも我身の功勞はないのである。

一一、凡そ廻向といふ言葉は、佛教一般に用ふるところであつて、自分の

自力他力の相異

有つて居る、善根や功德を廻し向けて、他の爲めに盡してやることである。併し慈けは他の爲めならずで、他のために盡してをけば、それが巡て自分の利他行にそなはる譯なれば、利他卽ち自利となるのである、此意味に於て、自力聖道門では、廻向といふことを矢釜しくいふ。ところが他力淨土門では自分のなした善根功德が、究竟的の佛果菩提に向つて、寸効も認めないものゆゑ、廻向といふことを談ずる必要がない、その代り、一切萬事、如來の他力から下されたものである、といふ意味をあらはすのに、廻向といふ言葉を用ふる事になつてをります。で、自力門では、自分が廻向者であるが、他力門では、佛が廻向者である、全然反對である。此の事を心得て置いて、眞宗のお聖敎を拜見すると、「廻向」といふ文字の捨て假名に、「したまへり」とある意味を領解することができるけれども、其心得がなくして讀むでは、異樣

に感ずるところが多いのである。其一例を出せば、『大經』下卷の冒頭に說き給ひてある、第十八願成就の文

諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向等

の「至心廻向」を、「至心に廻向したまへり」と訓ませてありますが、之を聖道門的に訓めば、どうしても「至心に廻向し奉る」と讀むのが普通である、さう訓まずに「したまへり」と捨て假名を付けられてあるところ、特に注意すべきであります。

一二、「月かげのいたらぬさとはなけれども、ながむる人の心にぞすむ」の古歌の如く、或る一つの漢文で書いた文章でも、眺むる人の心次第で、如何樣にも解釋のできるものである。昔、大谷派の深厲講師時代に、高倉學寮であつた事だそうであるが、講師專用の水桶を、學生達が濫用していけないか

ら、「此桶不可用」と墨黒々に書いて、それを防がうとした。爾るに惡戯最中の青年の所化のことであるから、何んぞこれくらゐの事で閉口いたさうぞ先方が先方なら、こちらはこちらと、此漢文の訓み樣を變じて、此桶を用つてやらうではないかと決議した。そこで或人は「此桶不可なれども用ふ」と訓むで用つた。次の一人は「此桶可かずして用ふ」と訓むで又用つた、三人目の所化は「此桶不可用ふ」と訓むで同じく用つた、最後に又一人が「此桶不も可も用ふ」と訓んで、四人乍ら用ふてはならぬと書いてあるまゝ、訓み變へて用ふて了つたといふことであります。さて面白いのは、此四人の訓み樣の替はつて居る所に、其人々の思想が表はれて居ることであります。「不可なれども用ふ」といふのは、餘程無理なところがある、「可かずして用ふ」といふのは隨分ずるいやり方である、「不可用ふ」といふのは、一寸諧謔を帶び

てゐる、「不も可も用ふ」といふ分は、餘程度量の大きい所があります。人の思想といふものは、一人々々みな異ひますから、その異ふた立場から眺めると、同じ文字が、種々樣々に解釋できる譯である。

丁度之れに似た話が、西洋にもある、或男が春の好いお天氣に、公園の廣い野原の芝生の上で充分に遊んで、小高い丘の上にある塔の彼方に沈む、入り日の景を眺めて、我家に歸つた、餘り美い景色であつたものゆへ、友人にその事を話すと、友人も亦た其處に遊んで、同じく夕日の景を眺めて歸つたその後二人が出會ふて、話は其時の事に及んだ。爾るに一人は、日は塔の右に入つたと云ひ、一人は、左に入つたと云ふて、激しく議論をしたが、打連れて村の教會の牧師を訪ねて、判決して貰ふことにした。牧師は二人の言ふ事を一往聽いて、兎も角現場に臨んで見ないことには、何とも言ひやうがな

いと三人連れで彼の野原まで出かけ、日の入る頃を待つて居た、开うして前に甲の居つた所に、今度は乙を居らせ、前に乙の居つた所に、今度は甲を居らせ、さあどうぢやと尋ねると、甲は乙に向つて、矢張りあなたの言はるゝ通りぢやと云ひ、乙は甲に向つて、矢張りあなたの云はるゝ通りぢやと云ひ議論は一人でに、解決したといふ事であります。

一三、一つ成就の文なれども、本當に佛のお慈悲の信じられて居ない人が

眺めると「至心に廻向したてまつる」と、己が功德を廻向することのやうに考へて、自力を募るが　充分佛力を信じなされた御開山の立場から、「至心に廻向したまへり」と、佛がこちらへ萬善萬行を下さることゝして、絶待他力をお味ひなされた。それでは、其萬善萬行を受取ることだけは、我が力であるか、否、そうではない「領解も機にはとゞまらず、領解すれば佛體にかへ

る」、御報謝の御念佛だけは、私が力であるか、否、それもそうではない、「名號も機にはとゞまらず、となふれば、やがて弘願にかへる」。されば「信ずる心も、念ずる心も、皆彌陀如來の御方便よりおこさしむるものなり」。之れほど無雜作に整へあげたお他力の法を、長い間聽聞しながら、未だ信仰のお腹のふくれないのは、何時も聽聞が、急所を外れて、横にそれて居るからである。そこになると、どう聽聞するのぢや、かう頂くのぢやと、聽きぶりや信じぶりを、詮議立てすれば限りのないことゆゑ、一も二もなく、御開山をお手本にして、御開山が、法然聖人の仰せを信じて、地獄へ行かうが、極樂に參らうが、そんなことを問ふ暇はない、たゞ、師の仰せなるが故に信ずるといふ、明了堅固の信念に住し給ひた如に、我々も御開山の渡らせ給ふ所に行くべし、と決心ができてこそ、眞にお流れを汲みたる所詮もあるのであ

る。

一四、雲山さんの『信仰說話』に出てをる話でありますが、或る求道に熱心なる人、諸所方々の名師を訪したけれども、未だ大安住の地を得られなかつたから、隱れたる一世の大德者として、知る人ぞ知る、紫野大德寺の宗般禪師を訪ふた。禪師が、お前は何宗の門徒であるかと尋ねらるゝまゝに、私は眞宗の門徒でありますと答へると、眞宗ならば、御開山の親鸞聖人を御存知かと問ひ返されたから、勿論知つて居りますと答へた、そこで禪師は聲に力を入れて、それでは一つ、その御開山にだまされぬかい」と申されれば、今の求道者は、立どころに徹底信に入つた、と申すことであります。兎角我々は、あてにならぬ凡夫同士の言ふた事なれば、何でもないことまで信ずるが、當てになる佛さまの仰せに疑を挾むやうな、譯の分らぬ惡るい

癖があります。

それに就て同じく『信仰說話』に、越前の覺然といふ人の、信仰に入られた話が出て居ります。此人、本山の大學校に居つて、卒業間近くなつて、不治の病にかゝられた。東山の中良井病院の院長の診察で、到底見込みがないと知れたから、國に電報を打ちて、父親に迎ひに來て貰ふことにした。爾るに肝心な、信仰問題に夜が明けて居ないものゆゑ。和上から、友人から、色々と訪ねて、信仰を得やうと焦つたが、どうしても解決がつかぬから、不安のまゝ、迎ひに上つた父親と共に、今日を最後のお別れと、西大谷に參拜した途中で、旦鏡橋の上まで來ると、原口針水和上が下りて來られるのに出會した、立ち乍ら事の子細を告げて涙と共に、願ふに胸中の煩悶を解決せられん事を以てしたれば、和上も深く同情し、茶所まで引返して、種々物語られた

後。「お前は死ぬるといつて慌てゝをるが、死にやあせん、決して死にやあせん」と申さるゝと、覺然は「それでも院長は死ぬると云はれました」と答へる、和上は又「いや、とても死にやあせん」と云はれる、覺然は「それでも院長が死ぬると云はれました」といふ。和上と覺然とが、さうして同じことを數回繰り返されたが、最後に和上は、默つて立ち上つて歸りかけられた、覺然は和上の袖を掴み和上、爾うなさらずに、どうぞもう一口御法話を願ひます」と嘆願する、和上は猶ほも聽かずに、逃げかけられるものゆゑ、覺然は力を込めて之を引き止めると、和上怫然として聲を厲まして曰く「御恩知らずの覺然め、中良井院長は、如何に名醫であらうとも、矢張り凡夫である凡夫の院長の言葉は信じても、凡夫以上の佛さまの仰せが信じられぬか、御恩知らずの不屈者め」と、非常のお叱りを蒙つたが、その時廓然大悟、信に

徹底いたされたといふ事であります。我々も覺然氏の如く、凡夫以上の佛の仰せといふ所を深く味はせて頂いて、無我に信ずるより、手はないのであります。

一五、 然るに多い中には、かういふ事をいふ人があります。果して未來に地獄・極樂存在するものなりや否や、あるとすれば、それを究めたる後でも遲くはあるまいと。此說最ものやうなれども、それは有限の我々の境界に在つては到底無駄骨折りに終るであらうといふ事を、既に釋尊が諷刺的に豫言せられた、一つの偶話がある。印度の或る長者の園丁が、其處に飼ふてある、人の眞似の上手な猿に頼んで、一日の水撒きの代理をして貰らふことになつた、之を請合ふた猿の一群は、不要な水まで撒くのは、無駄な骨折りであるからといつて、木や草に要する水の分量を計る爲め、一つ〳〵木や草の幹をつ

かまへて動揺さしてみた、根の大きく深いものは、水を多く要し、く淺小さいものは、少くてよろしいからである。而して後に、其の必要の分量丈づゝ與ふることにしたが、暑い一日中そんなことをして、撒水時間を遲らした上に、根が弛んで來たものゆゑ、折角の水も、何の用をもなさず、忽ちに全園の草木は、皆な枯れてしまつたといふ事である。

此話の猿智慧は我々の自力根性の、穿鑿心の事、此心を以て色々に計らふてみるが、「汝命根十餘歳」で、限りある壽命は、日夜に迫つて來る、其時に及んで悔ゆるとも、亦た何んぞ及ばんや、たゞ仰いで絶對他力の廻向法を信行するに若かずであります。

附録 無我の法悦

別府行の所感を追録したれば附錄として加ふ

一、安住

別府に滯在中、町で病院を開いて居られる、麻生醫師にお目にかゝつた。曾て脇谷搗謙師から、此方のことを聞いては居りましたが、お目にかゝつてそのお歡びの有樣を目擊して、有り難い感に打たれました。家庭の問題が本で、佛心に氣着かれたらしい。それかあらぬか、此方が昨年病中に口詠まれた歌に、次のやうなのがある。

彌陀たのむ身となりてこそ暫くのうき世の中もすみよかりけり

自分の實生活の歡びの味ひを、よく描した歌であると、深く感じました。

「浮世の中もすみよかりけり」、實に味ひのある云ひやうであります。元來はすみにくい、問題の多い、厭ほしい人生であるが、お慈悲のお蔭で、他が問題として頭痛に病むやうな難事を、少しも問題とせず、悠々と世を渡る、之が卽ち活きた信仰であります。

私の尊敬しつゝある、或仰信な布敎家がございます、此人、伯耆の或る町のお寺で、永代經か何かの法會に招かれて布敎して居られました。石州邊の或青年が、家庭の事情で非常なる煩悶を起し、無斷家出して此町まで來ることは來たが、旅費も使ひ果してしまひ、歸るには歸られず、困りはてた揚句鐵道のレールを枕に、轢死でも遂げてしまはふか知らんと、決心して、これから自分の死に場所を探すために、彼方此方を彷徨あるき、不圖、此お寺の

門前に通りかゝつた。門の柱に標札がかゝつて、太い字で永代經法會と書き左の側に、聞いた事のない布敎師の名と、右の方に何月何日より、何日までと書いてあるのが目に這入つた。勿論彼れは法國の石州の生れであるから、子供の時から、永代經法會といふ、名目ぐらゐは知つて居つたであらうが、未だ曾て、お寺まゐりのために、足手を運んだ經驗はない、言はゞ佛とも法とも知らぬ、部類の人間であつたから、お說敎を聽かうのどうのといふ豫期なしに、全く無我無心に、足は本堂の方に動いたのである。玄關に澤山の履物が脫いであるが、堂內はまことに靜かである。丁度お說敎が始まつて居るからであります。御拜に立つたまゝ、障子越しに聽いて居ると、布敎師の話が「此人生は苦の世界、厭ほしい世界であるけれども、一度信仰に入つてみると、苦が苦にならず、問題が問題にならぬ」、といふやうな、丁度今現に自分

死期を延ばす

頽悶の本に氣附く

が悶え苦しむで居る胸の中をよく知つて居つて、自分に向つて話して下さるやうな氣がして、非常に有りがたく聽聞したのである。

一寸と思ふたのに、案外說敎の果てるまで立ち聽をして、慌て立ち去らうとして、門前まで出ると、まだ明日も明後日も、お說敎があると標札に書いてあるものゆへ、何も自分は今日死ななければならぬ日限があるでもないから、死にがけの駄賃に、もう一日聽いてみやうと、翌日まで死ぬる事を延期した。明日になつてまた、其お寺にまゐると、昨日に增して猶ほ有りがたい其日も又、死ぬることを延期して、三日目もお說敎まゐりを續けたが、聽聞して居る內に、「一體全體、ワシャー何のために死なうなどゝ馬鹿らしい決心をしたのであらうか、聽いてみれば、別段問題とせにやならぬ程の事件ではなかつた。佛さまを知らなんだのが淺間しい、わしの迷ひの本であつた」と

御報謝の京參り

自分ながら耻かしうなつて來た。そこでお說敎が濟んでから、客僧室に案內を乞ふて、一伍一什を物語り、更に御法話を聽いて、一しほ喜んだのであります。

其後件の青年は、我家に歸り、信仰の上から、安住の日暮をして居りましたが、自分の今日の仕合せは、全く如來さまの御方便の賜である、御開山さまのお手引である、あの布敎師さまの御敎化であると、泌々佛恩師恩を感佩しまして、或年の春、御恩報謝に御本山まゐりを思ひつき。其途中、汽車から八九里もある山中の、件の布敎師の自坊にもわざ〳〵お禮に立ち寄り、沿道で信仰家を以て聞えてゐる、某々二三師を訪問して、法緣に浴し、京都へまゐられた。其中の某師から、此青年入信の因緣と、信後の歡びとを傳へ聞いて居る私が、今度別府で麻生醫師の、法悅の歌を得て、不圖、其事に

想ひ浮び、同醫師と、渠れ青年の、信仰心の厚いのに、隨喜せざるを得なかつたのであります。實に我々は、开う大した問題でもない事までを苦に病んで、身の置きどころもない位に、慌て騒ぐやうな、淺ましい凡夫であるが、信仰の上から之を見れば、實につまらぬ情ない奴であるといふ事がわかりまして、その下から、かゝる奴ゆへ、如來さまの容易ならぬお骨折りがあつた御恩の忝なさよと、一しほ有りがたく、勿體なく思はるゝのである。

きゝうればやすきみのりよいかばかりみ親のもとに骨やおれなむ、

之れも麻生氏の詠まれた歌でありますが、今申した味をのべられたものでありませう。

猶ほ同氏が昨年長らく大病で、死を眼前に控えて居りながら、大悲に安住して悠々自適、法味を口詠された、和歌、都々逸・俳句の類を數百首集めて、

印刷に附し、道友に頒たれた「法のしたゝり」を借覽し、其中から、私が特に有りがたく感じたものを抜抄して持り歸りました。それは上の二首の外

みほとけをみおやとしらで迷ひ行く罪とさわりの重荷せおいて

みほとけにうしろをみせてくらきよりくらきに迷ふ人のあはれさ

よき人はあとにのこりて罪深きわれのみさきにみだの子となる

○

よんで下さる大悲の前にすまなかつたと目に涙

久遠劫からまたるゝ親の聲きゝやなみだが先きに立つ

姿かたちはやつしもするがこゝろのくもりにや手がつかぬ

自力疑心の居りばをふさぐ佛智の不思議が入りみちて

信心があれば不思議に耳まではいる今まできこえぬ參れ鐘

見すてぬ大悲にきづいてみればみすてた諸佛も有難い
人の心は無形の鏡へだてがほすりやへだてがほ

二、聽聞

前述の青年の入信で、最も明かなるとをり、我々は聽聞によつて、法に入るのであります。時偶には、他の方法で、入信するものがないにも限りませんが、耳で聽いて領解する法が、他力の信仰である。之に就て想ひ出したのは、故伊井勸學のお話しに、我々が、外物を攝取する機關が五つある、眼・耳・鼻・舌・身の五官が之れであつて、眼は色を見分け、耳は聲を聽きわけ、鼻は物の香を嗅ぎ、舌は嘗て味を知り、身は觸れて剛柔等を知るのである。爾るに、眼にせよ、鼻・舌・身體にせよ、皆な自力が利くのである。物を見まい

と思へば、自分で閉ぢることができる、嫌な香ひと思へば、息を外に向つてすればよい、好かぬから食べまいと思へば、口を閉じ、身體に觸れるのがいやならば、避けたらよろしい。他のものは皆な自力が利くが、耳に限つて、自力が利かない、手にでも頼んで、耳の穴に蓋をして貰はなければ、どんなに矢釜しい音がしても、這入つて來るのを防ぐ譯に行かないのである。斯やうに自力の利かざる耳の穴から聽かせて、心のどん底まで、到り徹かせにやあおかぬのお慈悲が、如來の本願である。」と申された事を記憶してをります少し穿ち過ぎた言ひやうにも聞ゑるが、自分の信仰の味の上から、斯く味はれたのは有りがたい。

さて聽聞のしぶりについて、或人、耳に種々の部類があるから、種々の聽聞ぶりがあるといふことを申すに。一には鐵砲耳、之れは幾ら聽聞しても、

最上等の耳は何れ

少しも耳の中に止まらず、右より入れば、左に抜け、左より入れば、右に抜ける、一名地獄耳とか、底なし耳とか申すと。第二には味噌漉し耳、之れは味噌の粕を漉す器のやうに、聽かねばならぬうま味は聽き抜かしてしまひ。譬喩や因縁や、話し振りや辯舌や、信仰に用のない粕だけ耳の中に殘し、此度の御講師はどうだ、などゝ説教のよし惡しの批評だけをするやうな耳を有つて居る部類。次に箕耳、之れは前のと反對に、要らざる所に心を止めず、肝要なる信仰上の問題を主として聽聞する。恰も米や麥の塵あくたを拂ひ除ける、箕と申す器のやうな働をする耳。已上三種の耳を、上・中・下に分てば勿論最下等は鐵砲耳で、中等が味噌漉し耳、上等が箕耳といふ順序になるが箕のやうに選り聽きをするのが、果してよい聽きやうであらうかどうかと考ふるに、未だ完全なる聽聞ぶりではないのである。さうなると、私は如何

或同行の正信偈の讀み樣

なるものでも、貰ふたものはすべて入れる、乞食の持つてる袋のやうな袋耳、又は禪僧の托鉢に使ふ鐵鉢のやうな、鐵鉢耳といふ最上の耳があると思ふ。

何事のをはしますかは知らねどもたゞありがたさにぞ涙こぼるゝ

何時も無我な信仰の引き合ひに出さるゝ歌であるが、無我になつてみれば、聞くことも、見ることも、遭遇することも、すべてが法悦の因縁ならざるはないのである。

或同行が、お正信偈の文字は知らぬけれども、覺えた勢で、いつも暗に讀む、一切群生蒙光照の句まで來ると、思はず有り難たうございますといふ、文字の讀めぬ彼れは、如來さまが我々を皆な婿にしてお呉れる、御親切ぢやと味はふて喜ぶのである。信仰の尊い所は、實にこんなところにあるではありませんか。之れは信仰上からではありませんが、たゞ無我な點だけよく似

て居るのは、私の長女、今年六歳になりますが、お正信偈の善導獨明佛正意と、私が句頭しますと、「可愛嬢さんよういゝ」(矜哀定散與逆惡)と申して、あの次の一句を、如來さまのお呼び聲と思ふて居る樣子でありますのが、何となくいぢらしうございます。他さまから物を頂いた時は、必ずお内佛さまへお供へして、それを頂戴しますと、直に行きて、丁度お友達か何かに物言ふ如く、御尊さまのお顏を仰いで、いと馴々しくお賴みするといふ習慣がありますから、そんな心じ、お勤めの聲を聽いて居ると、あー聞えるのであらうと、私は常に思ふてをります。信仰のありそうにもない子供でさへ、かくの通りでありますから、仰信なお同行が、一切群生を婿にしてやらうの大悲と聽いたり、聞信如來といふ如來さまが、おいでになるとよろこんだりするのは、無理からぬことゝ

思ひます。

雲山さんから聞いた面白い、滑稽的の眞面目な有りがたい話。或同行、京參りをして、先づ西本願寺に參る、御眞影さまへ叮嚀にお禮をして居つたがふとあの大きな菊釣のお輪燈が目に入つた、御開山さまの御敎では、聞(菊)く一念が肝要ぢやゆゑにと味はつた。次にお隣りの興正寺に參ると、抱き牡丹の釣のかゝつた、お輪燈がかゝつて居るゆゑ、之れは攝取不捨の味ひとよろこんだ。次にお東の御本山へ參ると、新しい大きなお堂に、而も派手なお莊嚴が奇麗にしてあるのに、お輪燈だけは、何も飾りのない輪釣であるからこれは一心一向の味ひぢやと首肯した。最後に佛光寺へ參つてみると、下り藤の形のお輪燈ゆへ、下るほどその名も高し藤の花、信後の心得をお示し下されたものとよろこんだ、といふ話しである。かくの如きことは、田舍から

遙るばる上京した無我なお同行に、ありさうな事實であります。

そこで話は前に戻りまして、どういふ聽きぶりが肝要であるかと申すのに蓮如上人は「聞くといふは、たゞおほやうにきくにあらず、善知識にあひて南無阿彌陀佛の、六の字のいはれを、よくきゝひらきぬれば、報土に往生すべき、他力信心の道理なり」と、仰せられてありまして、「きゝひらく」といふことが肝要であります。ところが此のひらくといふについて、耳の穴を塞がないで、耳をひらいて聽く、さうすると、如來の仰せがそのまゝお這入り下さる、中に何物も入れずに、空にしてきけば、這入らぬことはないお慈悲であります。雜行・雜修・自力疑心を置かない有樣であります。(之が一つ)。

次に聽いて聽いて、聽き貫いて、お慈悲がわかるまできく、大概のものが、いゝ加減な所で、根氣負をするゆゑ、信仰がひらけないのである。難信の法

とあるから、充分聽かにやあならない、「聽聞を心に入れ候へば、おん慈悲にて候あいだ、信はうべきなり」之れが一つの解釋。

耳の穴を、よう堀つて聽け、お慈悲の底を、充分叩いて聽け、此の二とをりのきゝやうが、よくきゝひらくといふ味であります。爾るに耳さへ堀つて聽けば、お慈悲の底は叩かないでも聽えるが、お慈悲の方さへよく叩いて聽けば、耳の穴は塞いで居つてもよいかと申すに、兩方が揃はなければならぬ。それゆゑうつかりして居つては、信仰は得られないのである、熱心に求めて、熱心に聽かなければならぬのであります。

別府の溫泉は、全町到る所を堀つても、どこからでも湧き出るといふところが、他に類のないところであるさうである。かくの如く豐富な溫泉ぢやけれども、堀らなければ、湧かぬ、大地の底は、まるでお湯ばかりで滿ち充ち

宿善の水は慈悲より湧く

て、丁度別府といふ町全體が、お湯の海の上に浮んで居るといふ有様である。宿善の水けれども、溫泉の湧く湧かぬは、堀るか堀らぬかによるのである。宿善の水は、我等すべての人類の心の底は勿論、此世界のあらゆるもの〻中に、充ち満ちて、どうしてなりとも、我々にお慈悲を徹けたいの親心が、世界全體に働いて下さるのであるが、その宿善の開くと開かぬとは、聽聞の堀り拔き井戸を、堀るか堀らぬかによるのである。善知識にあひて、南無阿彌陀佛の、六の字のいはれを、よくきゝひらけよとのお勸めは、お慈悲の水を、我々の心の底に湧かしていたゞく、唯一の道として、聽聞に心を入れよとの御親切なる御教化と、いたゞかなければなりません。

眞鍋將軍の入信談

三、法悅

西法寺の御住職速見さんから、昨年同町の公會堂で、眞鍋大將のせられた演説のお話を聞いた。眞鍋將軍は、淨土宗の門徒である緣故で、同將軍が昨年夏、溫泉に來て居られるのを幸ひに、淨土宗の人々が夏季傳道の演説會の席上へ出席を乞ふた。その席での話に、自分が信仰に入つたのは、先年廣島の師團長時代の事である。眞宗の盛んな土地柄だけに、若い兵卒などが、熱心に佛さまを拜む狀態を目擊し、若し佛法の説く所が誤つて居れば、非常なる弊害がある、依つて佛法の穴探しの意味で、或る佛教の中學校の校長に就て、佛教研究を始めたのである。其校長は自分に淨土和讃の講義をして聞かせられたが、淨土和讃には、初めに佛には十二とをりの光明といふものがあ

ると云つて、その事が書いてある。何れも常識で判斷のできぬことのみであつたが、就中、超日月光といふ光は、太陽よりも月よりも、大きな光であるといふに至つては、荒誕無稽も甚だしいと思ふて、色々質問をすると、校長は、まあその内にわかりませうと云はれた。自分は幾ら考へたつて、そんな馬鹿なことは、あるものぢやあないと言つたが。其日歸つて、ああは言つたものゝ、本當にそんな光があるか知らんと、窃に押入れを明けて、その中へ這入つて、戸を閉めてみた。なるほど日光も這入らない、まつ闇であるが、暫らく考へてをると、校長と議論した、超日月光といふものがわかつた、日光の照さぬ此の押入れの中でも、自由に這入つて來て、自分の心を照す光明が、超日月光といふものである、と斯う知ることができた。

自分はそれから、佛の御照覽といふ事を、否定する譯に行かない、常に此

の信念に住して、自分の行ひにも心の持ちやうにも、言ひ知れぬ有り難い味を見出しつゝあるのである。先年淨土宗の元祖法然上人へ、明照大師といふ御諡號を賜はつた、あれについて私が、宮内省との間に立ちて、多少のお世話をしたといふ所で、愈〻諡號宣下と御決定に成つたお知らせがあつたから、直に參内して、聖旨を承はつて、歸りがけに、是れまで自分は耳が遠くて非常に不便で困つて居つたが、その日歸りがけにその遠かつた耳が、ツンと鳴つて、非常によう聞えるやうになつた。それから今日まで、そのまゝ續いて居るが、これも他の用事で參内したのではない、法然上人の諡號の件で參内した時のことであるから、佛祖が私にかういふ幸福を與へて下さつたのだと、心から感謝して居る。

また、日露戰爭の功を賞せられて、授爵の恩榮に浴し、それを拜受して東

京から歸りに、伊勢大廟へ御禮に參らふと思ふて、名古屋から、關西線に乘り替へ、山田に着いてみると、勳章の入つた荷物は、直に廣島へ送つておいたものゆゑ、勳章がない、綬だけしか持つて居ない。綬だけでは、宮上りに違法であるが、軍人の服裝などに、さう精しうない神官の眼を、胡麻化すぐらゐなことは、何でもないけれども、神佛の目を胡麻化す譯にゆかぬから、神官にその事を白狀して、これで許して呉れと賴んだのである。此等の如きも、超日月光といふやうなことが、わかつて來たお蔭であると、歡んだことである。」

眞鍋將軍の入信談は、曾て積德院連枝の隨行をして廣島に行かれた雲山師が詳しく雜誌『信仰界』で發表せられた事もあるゆゑ、讀まれたお方は御存じと思ひますが、今の話と繼ぎ合せてみると、いよ〳〵ありがたい味がござ

います。淨土宗の人であり乍ら、その法悅の模樣は、少しも愚夫愚婦と異ならぬ、無我の信仰から、湧き出てまいるところが有り難い。

すべて我々の修道上におきましては、本當に歡んで居る法悅の狀態を、見たり聞いたりして、それに隨喜するが、一等早道でもあり、効も多いやうに考へます。私は茲に、世にも稀なる、有り難た屋のおさきさんの事について、のべてみやうと思ひます。此同行は石州の東部の某寺の門徒で、今、五十五歳かになられます。十年程前から家業の呉服商がだん〳〵具合が惡くなつて、間もなく破產して了つた。これもよく〳〵の因緣と諦めて、法心いよ〳〵篤く、貧苦の裡に、歎びの日暮しをつゞけて居た。七年前の御開山の御遠忌に、團參の勸誘を受けたけれども、つい二三月前に破產した手前を憚つて、上京はせなかつた。團體が出て、歸るまで十日間といふものは、自分も

團參の留守でお通夜

一緒に京まゐりをした心持で、夜な〳〵眠りもせず、村のお寺でお通夜をしました。あまりに口惜かつたものゆゑ、その事を出稼ぎ先の夫に、手紙でふてやつたところが、夫は此次の御法會（其時と翌年と二回御遠忌がつとまつたその翌年御正當の分）に參るやうにと云つて、旅金を送つて越したものゆゑ、團參に加はつて上京した。他の團員は、諸所方々の見物に出て行くがおさきさん計りは、毎日〳〵御本山に詰め切つて、たゞの一回も參詣を缺かした事はなかつた。或日お練りの高廊下の際に坐つて、お練りを拜むで居ると、求めても爲いこと、自分の膝の上に、散華の花片が一枚落ちて來たものゆゑ、その喜びと云つたら、又とないよろこび、餘りの嬉しさに、目をつぶつて、當てどもなくお禮を申して、ふと目を開いてみると、その花片は、姿を隱してしまつた。お隣の北國邊から參つた、女同行が取つたものとわかつ

散華の花片を拾ふ

宿世の因緣か

門前の數へ歌

たゆゑ、凡夫の淺間しさに、面憎しとは思つたものゝ、前世であの人の物を盗んだ報ひゆゑ、その取り返しに會ふたのだと、愚痴を抑へて、お念佛を申して居れど、どうしても惜うて仕方がない。どうぞ半分だけ分けて下されぬかと、頼みに頼めど、更にきゝ入れてくれぬ、それではもう一度拜ましてなりと下されと頼んでみたが、それもできぬといふ。もう云ふも詮なしと思ふて、よく〳〵の因緣とあきらめて、お念佛申して居る中に、お練りは通り過ぎて、群集は一齊に起つて騒ぐ、丁度そこにお巡査さんが、聲を嗄して制して居つたから、あの方に頼んで、今のお婆さんにもう一度、あの蓮華を拜まして貰はんかとも思つたが、あれはそんなことのために來てござるお役人さまではない、と思ひ直して下向した。大師堂の門前の石橋の上まで來ると、よい聲で、有り難い數へ歌を唄ふて、その歌の書いた紙を、人に配つて居る

人が居つた。暫く立つて聞いて居つたが、餘りありがたいから、一枚下されと所望すると、二枚まで吳れた、それを貰つて、宿屋に歸つて他の同行に見せると、自分も行つて貰つて來ると云つて、二三人貰ひに行つたが、探せど〳〵見當らなかつたと、失望して歸つて來たものゆゑ、又それを因緣にしてお蓮華の代りに、御開山が此有り難い歌を下さつたのだと喜んだのである。

此おささん、二三年前から、自分の村に、鐵道工事監督に來て、隣家に住んで居る、矢田某と云ふ技師の、若夫婦と心易くなり、用事の手傳などして居る內に、佛とも法とも知らぬ、その細君を、お寺に參り說敎を聽き、佛さまを拜むやうに導いた。本年一月六日に、細君はイカイヨウ病で、三つになる兒を殘したまゝ、頓死してしまつた。その兒の世話をして技師を慰めて居たが、今年の二月の頃であつた、子供を連れて豐岡の細君の身內、中源に

使ひに來た。其勞を慰める意味で、豐岡から京まゐりをさせて貰つて、興敎書院で四五日泊て貰つた。明けても暮れても、色んな話を持ち出して、有り難いなあ、嬉しいなあで、主人の淸水氏と細君とを相手に法悅談を試みる、忙はしい乍らに、釣り込まれて、三四日大笑ひで日暮ししたと云はれたが。其間にも每日御本山に詰め切つて、お勤めの時も、總會所の說敎にも、缺かした事はなかつた。或日御堂の椽に、鳩の糞が澤山落ちて居るのを見て、親樣の御座どころが、かうほこりまぶれでは、あまり勿體なきゆゑ、バケツと雜巾を借りて、あの大きな長い御堂の椽を、雜巾で奇麗に拭いた、中飯も食べずに、朝から夕方まで、一日かゝつて、夕方に歸つて來ての悅びに、今日は大谷さんへまゐらして頂かうと思ふてをりましたに、お掃除しながら、御堂の椽から拜んで、餘計に有り難うございました、雪が降つて、人はさむい

〳〵と云はれるに、自分はお掃除しつゝ溫かくて汗が出て兩得しましたと。

一日、桃山御陵へまゐらして貰つて、歸つての話しに、お天子さまや乃木さんのやうなお方がおいでゆゑ、私のやうなものが、安氣で御法義がよろこばれる、その御恩が實に尊いと云つた。前に申した眞鍋將軍と、他の點は比較にも何にもならぬが、無我の法悅の模樣が、實に貴いのであります。

四、樂道

大きな道のために、自分を犧牲にするか、小さい自分のために、天下の公道を犧牲にするか、二つに一つ、人間は知らず識らず、どつちかの世渡りをしてをる、が、志士・仁人の岐るゝ所も茲にあるではあるまいか。兎角日本人は島國根性とでも申さうか、小さい小せり合ひのために、大なる道を忘れ

勝ちである。

今度の戰爭で各國人の氣性がよくあらはれて居る、長短はおの〳〵あるが國を思ふの念に甲乙はない、忠君は知らぬが愛國の精神だけは、決して日本人の專賣特許ぢやあないといふ事がわかつて來た。下層民の間では、同盟罷業だの、暴動だのと、例によつて例の如く、ワイ〳〵騷いだをるが、流石に一流の政治家や軍人などのやり方には、學ぶべき點が多いと思ふ。中にも最近では、米國の大統領ウヰルソン氏が、反對黨の首領ルート氏を遣露大使に選ばれた一例、又ウ氏と政敵の間柄たるルーズヴエルト氏が、義勇軍の總指揮官として、歐洲戰爭に出征せんと希望された一例は、世間の批評は兎に角大たる道の爲めに、區々たる私情を犧牲にしたる志人傑士の模範ではあるまいか。

すべて我々は、心の置き場を誤らぬことが肝心であります。公道に置くか私道に置くか、これである。公のために私を犠牲にするといふことは、非常に苦しいやうにも考へられ、又實際に行ひ難い事でもあるが、標準を此の道樂又は樂道といふ事に置けば、能きぬ事ではない。近頃流行だした安全第一といふ事も、結局そこにあると思ふ。我々はこの「道」といふものを、聖人や賢者が、先に定めて置いて、之を我々に强制しつゝあるやうに考へますから、道を渡るといふことは一種の束縛と苦痛とを伴なうものと致しますが之が根本的の誤解であります。廣い〳〵野つ原や、嶮しい山の中を、一人通り、二人通り、三人四人と、便宜に從つて通行したものが、後になると、他よりもそこが安全ぢや、樂ぢやと、皆が其處を通行するやうになつて、自然に大道といふものができる、天地の公道だの、人倫の大義だの、聖賢の道だ

のと稱するものも、亦斯くの通りでありまして、實は自然の大道なんであります。で苦痛や束縛の伴なふべき性質のもの、どころの騷ぎではありません、歩々に樂みが湧いて來る。歩々に明るみが增て來る。その反對に自然の大道に逆行する時は、苦より苦に、闇より闇に迷はねばならぬ。

西遊の序に、嘗てより、一度訪ねてみたいと思ふて居つた、耶馬溪を見ることができたのは、頗る滿足しました。寫眞で見て居つた青の洞門を、汽車から實地に見ると、一しほ壯大なのに驚きましたが、更に徒歩でその下をくゞつてみると、數層偉大な景色に驚くことでありましやう。誰しもあれを見て、今日ほど技術の發達しない昔の時代に、かく大工事をやつた人の苦心の程を、想ひ到らぬものはありますまい。傳ふる所によれば、此工事の成業者は、禪海といふ出家、元は越後の足輕であつたさうな。江戸の武士の家に奉

公して居る中、主人の妻と通じて遂に主人を殺して逐電した。後に發心して出家となり、耶馬溪まで來たが、此の通路の危險さ　親知らず子知らずにも増て、墜死するものが頗る多いといふ事を聞き、全く人助けの此大仕事を思ひついた。

禪海が出家に化て、耶馬溪に居るといふことを聞き傳へに聞いて、仇討ちに來たのは、已前の主人中川四郎兵衞が一つ胤、實之助であつた。禪海もそれを知り、仇は從順に討たせるが、自分が今着手して居る人助けの仕事を、完成した曉にして貰ひたい、願はくば他のために之を延せと乞ふた。敵もさるもの、それでは、お前の番をし乍ら、自分も鑿をとつて手傳はうと云つて禪海と同じ仕事に着手した。一方は之が終つたら仇を討たせやう、他方は討たう、怖ろしい敵味方の睨み合ひで、一つ仕事をして居つたが、一年二年、

五年十年、遂に三十年もかゝつて居る間に、全く敵味方の怖ろしい心は、何處へか消え去つて、無二の友となつた。「道を樂しむ者は幸なり」、今は早却つて親しさの餘り、「仇討たせう」と云へば「ほんにさうであつたなあ」と、昔の物語りとなつてしまつたといふ話。

我々は此話によつて、道を樂む上に、敵味方なしといふ事を見るのであります。世の中には、お酒を呑んで仲直りをしやうとするものがあります、それもまるきり無効な試みではないかも知りませぬが、勿論徹底的の遣り方ではありません。お酒に醉うて居る間は、これまでの睨み合ひの心がどこかに行きて、うか〳〵して居りますけれども、後に醉ひが醒めると、また元のやうになつてしまひます。同じ醉うなら、長く醉ふがよろしい、一生涯醉ふやうなお酒なら、本當に仲直りもできましやう。御慈悲の酒は一生涯醉ひます

それであるから、眞の仲直りは、お慈悲の酒を頂くに限ります。

人間は淺間しい感情動物であるゆゑ、初めは主義とか政見とか稱して、立派なことを申して居つても、後には感情上、好まぬ人や、嫌ひな人が出來て來る。一度さうなると、無形の塀が築かれたやうに、深い溝が堀られたやうに、向ひ合ふて氣持よい日暮しができなくなる、後には互に避けるやうになる、そろ〳〵批評が初まる、罵倒になる。然るに同じ道を樂む上よりみればかくの如き事は、まるで三つ子の遊戯にもまさる馬鹿らしきことである。宗敎には敵も味方もないのである。「阿彌陀佛と打ち込むつるぎそのまゝに敵も味方も西へこそゆけ」或人が、我々が未來お淨土にまゐりて、法味樂に住する時のことを想像すると、此世で何ぢや彼ぢやと騷いで居つたことが、阿呆らしからうと申して話されるのを聞いて、私はその人のやうに、未來を憧

憬するの念が強くないのを恥かしく思ひ乍らも、嘗て思ふたやうに、自分の意見を通さなければ、男の顏が立たぬなどゝ、意地張るほどの勇氣がなくなつて來た爲めに、どちら向いても、氣兼ね苦勞のない世渡りをすることのできるのは、幸福に思ひます。

鬪諍堅固の世の中とは申せ、近頃の世界の物騷さと申したら、話しにならない、戰爭・革命・政爭、勞働者と資本家、學者と學校當局者、曰く何曰く何一々申すに遑がない。之は人間の頭が、理窟だけに發達して、感情方面にすさむで行きつゝあるがためであります。どうせ此世は喧嘩の世界であるからよし、絶對の平和は望むで得られぬにせよ、なるがまゝに任せて置いては、餘りに自分に不忠實といふものではありませんか。自分を知れ、自分を知れさうして救はれる道と、向上する道を考へよ、之れが眞宗である。

向上の道
救濟の道

世の中の有りとあらゆる學問でも、教育でも、道德でも、我々が向上することのみ考へて、救はれる道を考へない、之れは丁度低い方へ低い方へと流れる性の水であるのに、高い方へ昇りたいといふ事のみ考へて、太陽の光線に照されて水蒸氣になるのを忘れて居るやうなものであります。墮落し行く自性と因緣に充ち滿ちた我々が、佛のお照しに預からなければ、何で向上することができましやうぞ。現代に叫ばれねばならぬことは救濟といふことである。

宗教の二類と他力宗教

救ひを叫ぶ宗教に、靈性を開覺せよと教へるものと、我機を見限れと教へるものとの二つがある。一は自ら救へよといふのであり、他は他に救はれよといふのである。併しながら自ら救ふといふことは、事實に於てできることではないから、他の救ひを求むるといふところに、宗教の有りがた味がある

然るに、どの程度まで他を信頼するかといふに、自分で始末することのできぬ大問題が起つた場合、その處分法を他に一任するがやうに、我等の救濟も絶對の他力に依頼せねばならぬ、他力にすがつて、そのお指圖のまゝに日送りするのが、眞の道を樂む所以であります。佛の道には、此れ〳〵はすべきこと、此れ〳〵はしてはならぬことゝいふ奬勵も禁制もないけれども、知らず識らず道に叶はさして頂く、樂み其の内に在り、倫理已上の貴い味があるのである。

補遺

前に揚げた逸話の主人公であるおさき同行に、今度石州に行きて會ふことができた。丁度私の行きた宣教會の會場たる仁萬滿行寺の門徒で、而も臺

所の手傳に來て立ち働らいて居つたのである。彼と同村で私の先輩たる石水師の話によると、今歳、夫の矢田技師の細君が、急病で死に瀕したる時、おさきさんはたゞ一途に法話しやうとするから、病床を取り圍んで居る無信仰の人々は、病人にそんなことを聽かしては、氣を落すゆゑ止せ〳〵といふて、近寄まいとするけれども、無理に押し分けて病人に一口でも話して聽かさうとする。後には寄つてかゝつて、おさきさんの口を、手で覆ふて聲を出させまいとするのを、排し除けて、遂に最後まで法話をつゞけ、病人はお念佛と共に息を引き取つた。豫て細君に、おさきさんは佛さんだから、冷飯は食はすなとまで、彼れを敬つて居た矢田技師は、この細君の急死と、おさき同行の感化とで、すつくり堅固の信仰に住し、今度旅行用の御厨子を購めることになつたとの事。私は之を聞いて、かくして道が、自然に傳へらるゝ

を、尊とい事に思ひます。

又た石水師の話によると、先年明治天皇崩御の時、村の學校の御眞影奉藏庫の前に、毎晩お參りする者があると見え、お花と線香の燻べ粕とが毎朝殘つてをる。生徒がそれを見て、色んな事を先生に尋ねるから、教育上甚白くないと思ひ、或日生徒一同に向つて校長より「皆さんの家に、若し線香やお花を學校の御眞影さまに供へる人があるならば、學校はお墓と違ふから、止めて貰はねばならぬと、言つて下さい」といふ話があつた。生徒はその事を家に歸つて話すと、その夜おさき同行は石水師を訪ねて、あれは全く私ともう一人他の同志との二人の仕業でありました、惡いことをしまして濟みませぬが、どういふてお詫をしてよろしいかと相談に來たのである。石水師は學校の方は自分が挨拶をしてやるから、志があるならば、寺の本堂には先

帝の尊儀が安置してあるから、寺にまゐるがよからふと諭し、それからおさき同行は第一期の國喪五十日間、日參をしたといふ感心な美談もある。

あんたは、どうしてそんなに有り難い身に、お育てを蒙つたのであるかと の私の尋ねに答へて、此同行の直接の歡びに、全く御開山の御遠忌さまが因緣になつて下さつたのでございます。あの歳に商買に失敗して、無一文になつてしまつて、悔んだり悲しむだりして、側の見る目も氣の毒に思うて下されて、或同行さんが言はれるには、今歳は御開山の御遠忌の歳だが、あんたに此世の財寶を離れて、御慈悲のお寶を頂けよとの、御催促ぢやと思ひなされと云つて、ねんごろに話して呉れられましたから、なんた有り難いことかいな、ほんにまあ御遠忌さまの紀念に、これは〳〵勿體ない有りがたいとそれから御恩が身に泌んで歡ばれます云云。

（大正六年六月三日校正を終りし時に此一節を附加す）

大正六年六月二十日印刷
大正六年六月廿五日發行

活ける信仰 奥附
定價四拾錢

著作者 京都市油小路御前通上ル 西谷順誓
發行者 京都市油小路御前通上ル 清水精一郎
發行者 京都市五條通東洞院東入 下村卯之助

發行所 京都市油小路御前通上ル 振替口座大阪一〇八一五番 興敎書院
發行所 京都市五條通東洞院東入 振替口座大阪七一七九番 法林館

印刷所 京都市北新町西小路入 弘文社

不許複製

佛典通俗講義

毎月一回

會費 一冊 貳拾五錢 郵税四錢
三冊 七拾五錢 郵税十二錢
六冊 壹圓四拾錢 郵税廿四錢
十二冊 貳圓八拾錢 郵税四十八錢

會員募集

□專ら現代刻下の宗教的要求を充すべく、確乎たる教義を根底とせる信仰純乎たる信仰を源泉とせる處世及び教義の通俗的解説、傳道の其本的智識を兼ね備へたる、一大叢書として立に有り。
□講するに教材と實感を調和し、達意と訓詁を折衷し、時に巧の譬喩を用ひ面白き談話を加へ行文懇切にして難解ならざるを期す。（大正六年一月創刊二ヶ年完結）

講義科目と講師

□佛遺教經講話　勸學　薗田宗惠師
□正信偈講義　講師　脇谷鴻諫師
□八宗綱要講義　講師　富井隆信師
□三帖和讃通解　司教　高木良一師
□眞宗要義論題　勸學　故伊井智量師
□支那佛教史　講師　妻木直良師
□六方禮經講話　講師　梅原眞隆師
□往生論註講義　講師　黑瀨知圓師
□選擇集講義　勸學　是山惠覺師
□一枚起請文講述　講師　鈴木法琛師
□御傳鈔講話　講師　足利宣正師
□歎異鈔講話　講師　花田凌雲師
□宗意安心問題講話　司教　西谷順誓師
□論語解説（蓮益大師釋全文入）　勸學　雲山龍珠師
□原人論大意　司教　赤松連城師
□眞宗綱領　講師　清原秀惠師
□御文章要義講話　講師　中井玄道師
□聖德太子傳講演　講師　杉紫朗師
□讃佛偈講述　講師　佐藤嚴英師
□十四行偈講述　編輯員　源哲勝師
編輯員　山名哲朗師

阿彌陀佛の信仰

增補再版

四六版五百餘頁
クロース綴美本
郵定價壹圓
税八錢

本書は日進月歩の學術思想と相關してそれに應じて説き、近時教界まれに見る良書なりと讀賣新聞は評せり

佛教大學講師
文學士羽溪了諦先生著

試みに三千年來の佛教史を繙いて見よ、印度支那日本の宗教的偉人にして最後まで阿彌陀佛の信仰に入らなかつた人は幾人ありや。實に阿彌陀佛の信仰は一切信仰の終局である。本編の著者羽溪學士は敬虔なる信仰生活に住して、常に阿彌陀佛の讃仰に最も熱心なる青年學者である。本編は卽ち其の讃仰的文辭の集まりである。而も書中引例の古今東西諸家の實驗的信仰は、讀者をして謂ゆる感情一編の信仰に陷らしめず、能く智的信仰を成立せしむるの良書である。

四章　三餘十節　增補

先に「四門三周錄」と題して雜誌に連載し、大好評を博せられたるもの、卽ち、四門とは、求法、安心、報謝、俗諦なり、三周とは、法、譬、因なり、演說の部は二十席の大演說にして、說敎の部に於ては「聖人一流ハタノム一念ノトコロ肝要ナリ」等ノ讃題にて、三十二席に分ち、師獨得の妙辯を振ひ四門の說法、三周の活用、眞にその妙に達す。

最新刊

演說敎說

一諦妙旨談

四六版五百餘頁
洋裝箱入美本
特價八六拾五錢
郵稅錢

本派本願寺布敎使

藥師寺晃照師

一演說の部一

□靈魂不滅の確證……四席
□三世の因果……四席
□宗敎とは何ぞや……四席
□眞の幸福者……一席
□三面的吾人なるを知れ……一席
□婦人敎會に就いて……二席
□道德の必要……一席
□普通道德の標準……一席
□佛敎道德の羅針盤……二席

一說敎の部一

タノム一念肝要—見眞大師の再來—佛法の花盛り—迷悟の關門—他人に托すこと—烏と雀と親子の話—明恩修の三慧—自力修行と他力橫超—油斷大敵—八十通の御敎化—熊谷蓮生と非人の念佛—元をただせば皆本國—無量の菩薩他力に歸す—六十七億の大菩薩—助け舟の譬—三界は大火の如し—弘法大師の入定記—未來及び地獄の有無—日本の神佛—此の世は神樣未來は佛—其他—全部三十二席百五十數節

何が故に此の問題を提出するか、何故に兩者の關係を說くか、蓋し生活の極致この兩者に存し、和樂の妙諦この兩者に始まり、興國の振敎の氣運も亦兩者に基し、現代の禍根も亦この兩者の融和活現によりて救はる。

實驗講話

自治と宗敎

最新刊

定價三十八錢
送料六錢
三六形洋裝美本

佐藤巖英師著

全編二十八章百三十餘節

是くの如く歡迎せり

徹頭徹尾御熱誠なる材料の豐富なる誠に有難きことに存じ候何卒廣く山間僻地にも行き渡る樣致し度ものに候宗敎は宗敎家のみの宗敎にあらざるが如く自治は町村役場員のみの自治にあらず自治も宗敎も心を治め人をして勇奮興起せしめ邦國の隆昌に貢献せしむの道なり。畢竟心と國家との連結なり宗敎なき人は亡び自治なき國は衰ふ宗敎家にして自治に及ぶ實に有り難き限りに御座候云々

—內務省田子書記官本書批評の一節—

黒瀬知圓師述

教家說林 第六編

大笑ひ小笑

定價七拾五錢
會員六拾五錢
送料八錢

面白く可笑しく嬉しく有難く、談笑の間に、如來の大法が傳へたい。當場のがれの人笑はせを避けて、眞面目な無邪氣な天眞な、而も皮肉な峻烈な痛快な『大笑ひ小笑』の裡に、深刻なる印象を與へ、牢固拔くべからざる信念修養が築きたい。此の要求に應すべく現れたのが本書であります。されば本書に接するものは、恰も走馬燈に對する如く、變現出沒計るへからざる、滑稽、頓智、實話、寓話、譬喩、訓言に應對暇なく、遑に小笑、忽に大笑。時に相好を崩し、時に襟を正しつゝ、省みて何時しか胸中或物を獲得せしむる、面白き有益なる讀物なり。

青年傳道文庫

西谷順誓師著

1. 眞宗とは何ぞや

西谷順誓師著

3. 佛教とは何ぞや

黒瀬知圓師著 近刊

4. 信仰とは何ぞや

好評再版

ポケット形
體裁優美
定價各拾錢
郵税各貳錢

我等同人相謀り、青年求道者幷に現代教界の要求を充たさんがため、傳道文庫を發行し、最も簡易平明に眞宗の歴史、教義一斑、信仰幷に模範、信者の入信事蹟、及び法悦美譚を始め、漸次餘力を以て各宗の夫れに及ばんとす、而して第一編は、眞宗の開闢より、教義信仰、道德、將來、等五編十五節、第三編は佛教の目的、方法、信仰、過去、將來、各宗の要義、等六章三十一節に分ち、通俗平易に講述せられたる良書なり。第二編は西谷師の御大典觀なり。

大綱編

本書は、親鸞聖人の信仰を、最も大全的に開顯せられたる教行信證を、最も平易に、最も大膽に而して最も系統的に門内及び門外の人の共に理解し得る樣講述せるものにして、六年の星霜と數十卷を渉獵して產めるは著者苦心の結晶なり。

教行信證講話

西谷顯摩師著

著者が眞宗教義に對する眞摯なる研究と卓拔なる識見とは嘗に著せる『眞宗教義及宗學』に於て世人の悉知する所なれば贅するに及ばず。而して著者の不斷の努力は宗祖親鸞聖人に傾注せられ、聖人の眞生命、眞宗教義の眞骨髓たる『教行信證文類』の研究は、宗祖六百五十回大遠忌を記念として試みられ、六年以來の星霜を經て、茲に漸く其の第一篇として本書を發表せらるゝに及びぬ。本篇は即ち序論及び教卷の末尾までを十四章に分ちて講述せるものにて、本文、素讀、連絡、古釋、解釋、大意等に分ち、頗る周到なる用意と苦心とを拂ひ、しかも深奥幽玄なる義理を通俗解し得難き文字に寄せ總假名を振りたれば、道俗を問はず容易く了解さるを得べく、從來の訓話的註釋の圈外に立ちて一新生面を拓けり。尙ほ本篇に繼ぎて『教義篇』『信仰篇』『卽陀篇』『對外篇』『求道篇』を續刊し、以て一部六卷を講了する豫定なりと云ふ。（教海）

定價壹圓參拾錢
郵稅拾貳錢
總かな付
文體平易
菊版クロース綴
箱入美本

文學博士 井上哲次郎氏序說
文學士 前田慧雲師序

二宮尊德翁と佛教

佐藤巖英師述

（第四版）

金五拾錢
小包料八錢

二宮尊德翁の報德主義と大乘佛教の教理と、翁が實踐躬行の成功事蹟を經緯し、嘗て農會に於て講演せられしもの、是れ實に帝國々民を教養する無二の福音なり。

佐藤巖英師講話

●新版

讃仰 歎異鈔講話

言文一致かなつき
定價金六拾五錢
小包料八錢

本書は現代の求道者に聖人の御信仰、聖人の御精神を紹介し、絕對他力の妙味を味ひ、眞俗二諦の根本義を、實例を擧げ、事實を示し、誰れ人にも了解する樣、實地に講話せられしもの也。

文學博士　前田慧雲師序　黒瀬知圓師述

最新刊

佛の心と親心

總かなつき　四六版洋綴　五百餘頁　實文一致

實價七拾錢　小包料八錢

從來親に孝行な物せし本は澤山にあるが、親より子に對する慈悲を講說せし者は少し、卽ち本書は佛が衆生に對する慈悲と同樣である事を實感に照し事實の例證を擧げ、而かも實地に應用して親の慈悲を說明したものである。前田博士の序文の一節に曰く、

家庭の好讀物

親子の情愛の深いことは、とても他人の想像外であつて、其味は實驗するに隨つて、愈切實に感ずるのである。親子の愛情はこれを佛の上より云へば、同體の大悲であつて、苦痛安樂は決して親と子と離れてあるべきでないのである。卽ち親は子と共に苦しみ、親は子と共に樂しむのである。親の方では子のよくなるのが樂みで、親は子のために身を忘れて案じ煩ふのである。佛の慈悲がその通りで、同體の大悲を以つて衆生を救ひ給ふのである(乃至)佛は常に一子の如く憐念し給ふのである斯の如く我とは靈夜深い佛の念力によつて生活してゐるのであるから、能く親の慈悲を思ふと共に深く如來の恩德を仰がねばならぬ。

司教　雲山龍珠師著

教家說林　第七編

信仰說話

定價七拾五錢　會員六拾五錢　送料八錢

雲山司教は溫厚なる篤學者である。六條學館の講師たること十數年のその間一意專心に子弟を敎養せられて、その淘冶を歷たものが既に數千名の多きに達して居る。また四方に遊化し、御同胞御同行に對して、出離生死の一大事を淳々として說示せらるゝごきは、言々肺腑を突いて出て來る。また敎壇上の人となつては、滔々たる懸河の辯は先づ聽衆を壓するの慨がある。その崇高なる信念と、その巧妙なる說話は共に當代に得難い敎家である。本書は同師が諸方で講演せられたものを蒐集大成したもので、新進敎家が座右の珍たるは云ふ迄もなく、僧俗を問はず誰でも一本を懷にして居つて善い本である。

教家
說林

近時學解を離れて
その門信徒に對し
て試みられたる大
悲傳普化聖業の實
地筆錄なれば以て
一宗布教傳道の範
となすべし

8 現代

眞宗勸學法話

本編に限り

三六版六頁餘頁
クロス綴美本
定價八拾五錢
郵稅八錢

本集には眞宗本派に現在せる十二勸學の說教法話を收む

（卷頭には十二勸學の眞筆を寫眞版にて入る）

全部六十席

念佛成佛是眞宗 ……勸學 赤松連城師 四題
金剛の信心 ……勸學 松島善海師 四題
生佛二者の關係 ……勸學 前田慧雲師 五題
他力の安心 ……勸學 多田專淨師 三題
時機相應の法 ……勸學 熱田靈知師 四題
安心と起行 ……勸學 是山惠覺師 四題
平成業成 ……勸學 檀特敎遵師 四題
信疑決判 ……勸學 鈴木法琛師 四題
人格と信仰 ……勸學 蘭田宗惠師 四題
念報慈恩の生活 ……勸學 藤島了穩師 四題
聖人一流章 ……勸學 松浦僧梁師 四題
慈父と悲母 ……勸學 森達立師 外四題

信仰と現生活

—1—

司敎 花田凌雲師著
三六版頗る美本
定價拾五錢郵稅四錢

信仰の活現

—2—

三六版頗る美本
定價拾五錢郵稅四錢
布敎使平田華藏師著

敎壇文庫

時代は旋火輪の如く移り、人智は奔馬の如く進めり、隨つて敎壇の新潮は、單に敎材の排列、巧妙なる譬喩、懸河の辯を主とする、形式的講演に飽足せず更に進みて完全なる思想と、精確なる智識と、躍動せる生命とを、把捉せんとする現象を呈し來れり、されば敎壇に立つの人、敎壇に侍して道を求むるの人、共に新思想を求め、信仰の活力に親炙せんとする熱情止まず『敎壇文庫』の世に出づる所以のものは、偏へに兩者の需用と供給に資せんとするにあり。

第一編 眞宗の道德の果して如何なるものなるかに迷へる多くの人々に對して頻ぶる陳腐なる「たしなみ」主義と一名に於て敎義の實際との上より平易に親切に眞宗道德の一斑を說述せらる。第二編は青年求道者に對して「現實生活より信仰へ」の徑路を著者の實驗上より平易簡明に講演せられしものなり。

本願寺布教使井上靈奥師著

二諦修養教談

正價貳拾六錢　郵税　六錢

青年修養教談

正價貳拾八錢　郵税　六錢

婦人修養教談

正價貳拾八錢　郵税　六錢

師は元高輪佛教大學卒業後、五ヶ年間北米の開教使として、熱心に各方面の布教傳道に從事せられる。即ち本書は、一は一般信徒に對して、二諦の教旨を宣布し、二は專ら青年諸士に對し、三は婦人諸姉に對し、實地に布教せられし教案なり。教材の新なるは勿論、何れも實行的に新案工夫して、一は讀者諸兄姉の信仰と修養に資し一は現代布教家の參考に供せらる。

325
516

終